



関西学院同窓会 大阪支部

INTERVIEW

<http://www.kwangaku-osaka.org>

2017.02

探訪記

FILE

No.15

株式会社東海メディカルプロダクツ 会長
筒井 宣政氏

昭和39（1964）年 関西学院大学 経済学部 卒業

人と人——命と向き合う起業

——世界を代表する起業家のお二人（※1）として「起業」とは現代社会にとってどのような役割を持つものとお考えですか？

社会構造を守ってゆく上で起業は不可欠なものだと思います。最近の統計では起業する数よりも廃業する数の方が多いそうですね。であればなおさら起業はしていかねばならないでしょう。ただ一方で「お金さえ儲かればよい」という拜金主義的な発想が力を持つていることも事実です。これは多分にアメリカ的

な発想が入ってきたことによるものではないでしょうか……これに完全に傾倒することは良くないのではないかと思います。日本には日本古来の精神というものがあります。その精神を捨てることなく、両者をうまくミックスすることを考えるべきではないでしょうか。

日本古来——例えば浮世絵とか刀のような工芸品だとかは、皆で世界中の人を魅了する力をもったものですが、いずれもそれで大儲けしようと思つて作つたものではないでしょう。町の皆さんとか、その周辺にいた人たちに喜んでもらうためにつくる……



株式会社東海メディカルプロダクツ 会長
筒井 宣政（つつい のがまさ）氏

：そういうものだったと思うんです。戦争に負けて、とことんまで荒廃してしまつたにもかかわらず、便利で精巧な家電を作り出すことで再び繁栄してくる。これは世界的に見ても稀なことですね。その背景に「良いものをつくる。人に喜んでもらうものをつくる。」という日本人独特の発想があり、それゆえに日本は早くから敬意を払われる国でもあったのだと思います。私自身はこういった考え方が「正しい」と信じていますし、それが世界のスタンダードでなくても、世界の方がそれを見習つていく形になるべきだとも思っています。「儲かれば良い」……そんな思いで起業するべきではないでしょう。特に私は医療系の仕事をさせていたたいてるので、「具体的に人の役に立つ施設をつくるのにお金が必要だから」という理由の上場であれば理

解が出来るのですが、合理的なお金儲けのための上場というのはどうも合点がいきません。しかも上場すれば株主優先の思考になってしまう。そういう形にはどうしてもなりたくないもので、何度も勧められたのですがずっと断つてきました。

——拜金主義を「数子」とした場合、日本の精神性は「イメージのカ」ということにならなくてもいいですね。先ほどの懸念はイメージ力の低下と考えることも出来るのでしょうか？

イメージ力自体が低下しているとは思いませんが……偏つたイメージの仕方をしていくかもしれない。拜金主義的な発想、そのベクトルでイメージ力をたくましくさせている、ということではないでしょうか。

イメージという概念についてあまり深く考えてみたことはないのですが、それを「目標」という言葉で表現すれば考えやすい。漠然としたものでは無く、目標が明確であれば確固たる方法論が見えてくる。これもイメージの力だと言えるかもしれません。

例えば……まあ、これはちよつと古いものの考え方ですがね。例えばある女性が東大出身の男性と結婚をしたいという「目標」を持ったとします。でもこんな春日井の田舎に居たままではいつまで経つても相手は来ない。東大出身者の多い企業はどこかをリサーチして、そこを売店であるとか、食堂で働くとか。で、「この人ええな」と思えば、ちよつと余計目におかずをつけるとか（笑）。そういうことをすれば表現性がありますよね。家を建てる場合でも同じです。誰でも「家は欲しいか」と聞かれると、欲しいと答えます。さらに突っ込んで「何坪の土地に、どんな家が欲しいですか？」と聞けば、「なるべく広い方がよい」……それは目標ではないですよね。目標をイメージする力がないというのは、例えばこういう状態のことを言うのだと思います。これを具体化する力があれば、さっきの同じ質問に対して「50坪の土地に30坪の家を建てる」、「地域に関しては名古屋の街中」、「いや、春日井でいい」という答えを描くことが出来るはずなん

です。そうすると随分遠くに見えていたものが、「あれ？意外に実現可能なんじゃないかな」という道筋が見えてくる。お金に関しても多ければ多いほどいい」というのは、全く具体性に欠けていますね。イメージの力がないからこそ、拝金主義に陥るのかもしれない。その中で争んだベクトルのイメージが力を発揮している。これが現代のイメージ力の問題だと言えるかもしれません。

——**具体化する力とイメージは、鍛えることが出来るものなのでしょうか？**

誰でも可能性は持っているはずなんです。ただ、皆なかなか気づかないだけなんです。

これは私どもの日々の仕事でも、こういったイメージから具体化へということは、常に気を付けていかなければいけないことではあるんです。例えば、新生児の赤ちゃんで、肺動脈弁が詰まっているというケースがあります。その場合、そこから漏れている血液だけでもしばらく赤ちゃんは生きていけるのですが、4か月を過ぎると体が大きくなつてしまつて無理なんです。その詰まっているところにバルーンを持つてきて、広げてあげれば赤ちゃんは助かるのですが、世界中どの医療機器メーカーもこれに着手していません。理由は単純で、こういったケースで生まれてくる赤ちゃんの数が、数万人の中で130名くらいなんです。その130のために開発しても採算ベースに乗らないんです。

ただ我々の目標は二人でも多くの命を救おうということにあります。この話を聞いた以上は何が何でも開発しようということになったんです。カテテルもバルーンも世界一小さなもので、つまり世界最先端の技術をもつてこないとはいけません。コストはかかりますが、何とか作ってみました。お医者さんにも両親も大変喜んでくださって……。勿論採算は取れません。でも目標がしっかりとあれば、考え方の順番が決まっています。まず

は必要とされる良いものをつくる。でも採算が合わない。だったら他に採算の取れている部門で埋め合わせをする。でも、何かの拍子でこの売れていた部門が売れなくなつたときは開発を止めなければいけなくなります。それをフォローするためには、何としても安定供給を考えなければいけない。販路を広げ、世界へと目を向ける。例えば世界の市場だと日本の30倍の赤ちゃんがいるわけですよ。その半分でもこの機器を使つてくれれば、生産量も上げ、コストも下げ、儲からずとも安定供給が出来るようになる。おかげ様で今では日本でも広く使つてもらっていますし、モンゴル、ヴェトナム、インドネシア、タイ、そしてアメリカも欲しいと言ひ出しました。

ですので「儲ける」ためのイメージではなく、大事なものを守るためのイメージによつて考え……こういったことを大事にしたいと思つていきますね。

——**世界という点ですが、医療系機器のシェアは殆ど欧米とアジアになるのは、**

その通りですね。これは政治的な問題も絡んでくるのでしようが、厚生省もなかなか医療機器に対する認可の基準を設定できなかったようですね。結果、高度医療機器に関して日本は輸入に頼るしかないんです。

なかなか認可の下りない厚生省が第一号として出してくれたのは我々のケースだったので……まあ、これはどうしても娘を助けたいという思いで必死でしたので、ただそれがモデルケースとなりました。このモデルを他の国内の医療機器メーカーにも共有していただいて、この問題を徐々にクリアしていくという方向に繋がっているように思います。

かつて小淵恵三首相が名古屋に來られたことがあつてそこで財界の皆さんと意見を交換する機会がありました。そこに私も参加させていた



いたのですが、その時に首相に「もしアメリカに何かの問題が生じて、日本への医療機器の輸出がストップした場合、一体誰が日本国民の命を守るのでしょうか」と、ちよつと大風呂敷を広げて話をしたんです。すると首相は「今すぐ別室に堺屋君が行つて、今後の方策を至急練つてくれ」とおつしやられた。そこで練つたのが科学技術基本法でした。小淵首相が倒れられて一時期立ち消えになりました。結局は可決しました。

——**娘さんを助けたかった……というのは、**

私の娘は先天的に心臓の問題を持っていました。この子を何とか助けたいという思いでお金を貯めました。そして方々有名な病院を回つたのですが現代の医学では手術が不可能という判断を下されてしまつたんです。

そこでフランスにこの分野の権威がおられるというところで、そこに相談に行きましたが、そこでも手術をしている最中に死んでしまう可能性が高い。仮に成功しても3年しかもたない。今の状態を保持すれば10年は生きることが出来るのではないかと、言われ、手術での治療を断念しま

した。妻の発案ですが貯めたお金は結局娘には使えなかつた……でも同じようなケースで生まれた子を一人でも多く助けることが出来る研究に使つていただければという事になりまして、寄付することにしました。ところが主治医が「一日一日の肩の荷をおろしてもらつては駄目だ。その手術費用を使つて筒井さんが人工心臓の研究をしてみてもいいかでしょうか。十年かれば相当良いものが出来るかもしれません。仮に出来なくても業界の発展には寄与できます」と言つてくださったんです。

とは言えね……私は出身が関西学院大学の経済学部です。医療系の知識は全くゼロ。東大京大、阪大の先生を訪ね一生懸命勉強しました。医療系の知識のほか生物学、あるいは流体力学なども学ばなければいけません。それらをすべて勉強したのですが……最初は随分恥をかきました。専門用語で博士が次々話をしてゆくの、「分からない」というと「あなた来るところを間違っているのではないかと」言われましてね(笑)。

——**命と金と両方を合つていられたい筒井さんの目から、現代人の「命に対する感情」とイメージの両方に映つていっているのでしょうか？**

大変大きな問題を抱えていると思えます。国際的にも目を覆いたくなるようなことは山ほどあります。それらの問題の本質は何であるかと考えると、簡単に言えばアメリカ流の資本主義に限界が来ているということではないかと。資本主義の「良いとこどり」を過ぎて、その根幹部分先日「カンブリア宮殿」に出演した(笑)時に、村上龍さんが私どもの活動に対して「ビューマニズムですね」と仰つてくださったが、何と云うのかやはり第二のイズムを生み出さないとこのままでは「命の重さ」はどんどん軽くなつてゆくような気がします。医療ではその点でも明確で、

日本の場合は殆ど保険でカバーされているので、どんな人でも病院に行けば診てもらえます。「お金がありません」と言っても「ええ」と言いつつ、それでも診てもらえる。アメリカはそうは行きません。どんな保険に入っているのか、その内容をチェックしてからでなければ診てもらえない。場合によっては今にも死にそうな患者でも、保険がカバーしていなければ追い出されてしまう。ドイツも同じでした。本当にそれで良いのか。それが人の命に対する姿勢として正しいのか。今のイズムには大変な問題が内在していることは間違いないと思います。

——第三の「イズム」的なもの……それが確固とした形を持っていない状態だと、その原形のようなものを社内でも共有なさっておられるのでしょうか。

そこまで壮大なものとは言えませんし、そういったものを構築するには私の人生がもつかわりか(笑)。ただ、ポリシーとしてわが社では社員のおやりたいことを尊重するようにしています。また自分で考えることを奨励しています。顕著なのは営業でしょうか。かつては私が全国回っていたのですが、お医者さんは、昼間は診察やお忙しいので、時間があるのは午後なんです。そこで北海道は北海道に、東北は東北に住んで営業をするということになっています。先生の傍にいて、じっくり「人を見る」ということですね。

午後からなので午前中は例えば奥さんの手伝いをして……まあ、そこは自由なので、パチンコに行こうが、何をしようがわが社としては不問にしています。ただお医者さんが「ちよつと来てくれ」ということであれば、仮にそれが夜中であっても行く。更にはおれはお付き合いが遅くなっても必ず家に帰る。「今日は先生と飲んでいて帰れなくなつたから、泊まります」は絶対にダメで、這つても家に帰る。出張は本社に報告に来るのが

出張。具体的な開発の状況とかプランとかをミーティングして、また散つてゆく。下の者は月一回、サブリーダーは月一回、サブマネージャーは毎週、マネージャーは必要な日は全て、自由でいいけれど、目的にしていることはきちつとしない……という体制にしています。

開発も一年生だから上げてはいけないなんてことはありません。しつかりとお医者さんの要望を聞いて、それをもとに自分で材料から完成まできちつと責任をもつて引き受ける。もちろんそこに必要な人材を派遣することもあつてはいますが、その要請を含めて自分で最後までやりきる。そういうルールのもとで自由にやつていいことになっています。

——会社の内部での人の育成についても、やはり「人と人」という点を大事にするところですね。その対称にある人工知能に関してはどのように感じておられますか。

人工知能が機能するということが自体は良いことだと思つていますが、やはり人と人という問題になれば、より合理的な方法という答えが果たして適しているのかどうか。お医者さんが「こういう機器はないか」という問い合わせに対し、メールで「添付を」眺めたいというのがあります。何かが生まれる要素というのがない。そういった意味ではモバイルというものにも疑問を感じるがありますね。医学云々でブラスを展示する場合、その回りに誰かが責任者となつて切り盛りをすることになります。その人が当日のブレーションですから、急に現場から居なくなるとまずいでしょう。でも傍にいる人間にきちつと言葉で「ちよつとトイレに行つてくるから五分後に戻る」などと伝えていけば、何か現場で起きても、例えばメデイカルドクターが「何々君は？」と尋ねられても「彼は××に行つていたので、すぐに呼んできます。少々お待ちください」とい

うことが出来るでしょう。でも携帯電話を持つていたりすると「何かあつたらかけて」と言いがちになる。すると彼は今どこにいるか分からない」という状況が生まれ、携帯がつかない」ともあつて。先生は「だったら良いよ」と言つて待つてくれないうちも出来ない。これはやはり「人と人」ということを考えると大変にまずいと思つてます。

人工知能というのはより合理化を求めるものなだと思つていますが、こつこつとした気遣いの部分の細やかさまでは理解できない。特に日本古来の精神性のレベルまで要求するなど不可能だと思つて、最初の話に戻りますが、それを大事にしつ、現代的な発想との折り合いを見出してゆくべきなんではないかと。

——最後に関西学院大学にメッセージをいただけますでしょうか。

Mastery for service — 奉仕の精神。この言葉に全て集約されていると思つてます。学校にいる間はまあ、校歌にもあるので言わされている感じではあるのかもしれませんが、実際に社会に出て、人に対して感謝をしながら懸命に向き合つてゆくことが、相手の喜びを生み、その喜びがまた自分のやる気を生み……その連鎖ですね。Mastery for service という言葉は本当に幅が広いので、常にそれを自問自答し、人に対していい加減なことではない。そつこつとした思いを共有できる仲間でありたいですね。

——ありがとうございます。

※1 筒井氏は2016年6月にモナコ公国モンテカルロで開催された世界大会「ワールド・アントレプレナー・オブ・ザ・イヤー2016」の日本代表に選出された。

※2 「日経スペシャル カンブリア宮殿」村上龍の経済トークライブ。テレビ東京系列局の地上波、および日経のサイトで放送されているトクダキョウメンター番組。筒井氏の出演は2015年1月8日。

2016年06月14日

場所：株式会社東海メデイカルプロダクツの社内
取材：中野順成/松野雄一/奥谷美紀子/谷口

編集部勤務

筒井 真政(ついで)のまこと氏
株式会社東海メデイカルプロダクツ 会長

- 1964年 関西学院大学 経済学部 卒業
- 1964年 東海興分限有株式会社 入社
- 1972年 同 専務取締役就任
- 1981年 株式会社東海メデイカルプロダクツ設立
代表取締役就任
- 1982年 東海興分限有株式会社 代表取締役就任
- 1991年 ヴァー1設立 代表取締役就任
- 2012年 株式会社東海メデイカルプロダクツ 代表
取締役就任 会長就任

編集後記

事業における「日本的発想」を具体化する力、人と人のつながり、いすれについても自体的で美に明快な発話でした。そして、とかく合理化を自問自答し流れを考慮せねばならぬ。社会のつながりや「かけかえのないもの」を知つたときに「Mastery for service」を感動するのかもしれない。

編集者 小島若菜(1995年法学部政治学科卒)